

- 晃 (1997) くも膜下出血(SAH)後における脳脊髄液 (CSF) 中組織因子とTATの動態; SAHの重症度および予後との関係. 第20回日本血栓止血学会 (1997年9月, 金沢). 血栓止血誌. 8: 264.
- 12) 島田逸人、相馬正幸、前田義久、松浦亮一郎、笠倉新兵、中村伸、加藤久雄 (1997) 排卵直前のヒト卵胞液の凝固線溶状態・なぜ卵胞液は凝固しないか: 第20回日本血栓止血学会 (1997年9月, 金沢). 血栓止血誌 8: 265.
- 13) 円城寺慶一、中村伸、武井明、紙窪勇一、久米田幸介、居石克夫、加藤久雄 (1997) サルの肝細胞はヒトやラットと異なりTFPIを効率よく発現する. 第20回日本血栓止血学会 (1997年9月, 金沢). 血栓止血誌 8: 301.
- 14) 伊藤要子、中村伸、中津川重一、綾川良雄、宮田伸樹、小栗隆 (1997) 14種のヒト腫瘍組織由来腫瘍細胞の細胞線溶および組織因子からみた転移・浸潤能. 第20回日本血栓止血学会 (1997年9月, 金沢). 血栓止血誌 8: 325.
- 15) 上野貴之、戸井雅和、中村伸、富永健 (1997) 癌患者における血漿組織因子濃度の上昇とその意義. 第56回日本癌学会 (1997年9月, 東京). Jap. J. Cancer Res. 88 (Suppl): 142.
- 16) 中村伸 (1997) サルモデルでのエンドトキシン応答機序の検討. 第3回エンドトキシン研究会・シンポジウム (1997年9月, 京都). 抄録 p.15.
- 17) 安江正明、中村伸、高井敏朗、高橋恭子、横田豊一、奥村康、羅智靖 (1997) ヒト型化抗ヒトIgEレセプター抗体 (HuCRA2) Fabの抗原性および抗アレルギー作用: 霊長類による検討. 第47回日本アレルギー学会 (1997年10月, 東京). アレルギー 46: 945.
- 18) 浅岡一雄 (1997) 薬学領域での実験用サルの研究動向、有用性と課題. 第4回HAB協議会学術年会 (1997年5月, 東京). 講演要旨集 p.79.
- 19) 小林直子、榊渕泰宏、堀江利治、石川勉、浅岡一雄、成松鎮雄 (1998) プロプラノロール活性代謝物によるサル肝シトクロムP450-2D酵素の阻害機構. 第118回薬学会年会 (1998年3月, 京都). 講演要旨集 3: 24.
- 20) 成松鎮雄、山本重雄、小林直子、堀江利治、佐藤哲男、浅岡一雄 (1998) 霊長類肝による

β 遮断薬酸化反応の立体選択性について. 第39回生化学会中国・四国支部例会 (1998年3月, 徳島). 講演要旨集 p.24.

ニホンザル野外観察施設

大澤秀行 (施設長・兼) ・東 滋¹⁾・

渡邊邦夫・足澤貞成²⁾

本施設の運営は上記3教官のほか、鈴木晃・山極壽一によって進められた。平成9年度の各ステーションの状況は次の通りである。

1. 幸島観察所

幸島の群れは昭和23年以来の蓄積された資料をもとに、野外観察施設の中では独自の位置を占めている。主群のボス、ノゾは30才になったが、今年も健在でその地位を保っている。記録的に出産の多かった昨年の反動もあったのだろうが、今年には出産が5頭 (オス3, メス2) のみであり、死亡個体もわずかに2頭だったため、安定した1年であった。また近年は島との間にできた船だまりの方に砂がたまるようになったせいか、島が地続きになることも、やや少なくなってきている。ただ今年もツグミなどの冬鳥が少なく、全島的に春先まで木の実が豊富であったので、このままいけばまた来年度には多数の出産が見込まれている。平成10年3月の時点での島内の個体数は、マキグループ約10頭を含め93頭である。

文化庁の指導の下「幸島猿生息地保護対策検討委員会」が定期的に集まりをもち、幸島の保全策や整備、今後の研究所施設予算削減をにらんだ対応などが議論されている。今後の検討を経て、文化庁などに改善策をはたらきかけることになろう。今年度は、森によるマキグループのグルーピングのあり方や栄養条件とメスの性皮腫脹の関係、栗田博之による子供の性による死亡率の違いなどについての研究が行われた。また例年夏に学生実習が行われてきたが、大学院の制度変更等により学生増が見込まれているため、実習方法の再検討が必要になってきている。

2. 下北研究林

1997年12月の一斉調査は、足澤が1973年に下北に常駐するようになって以来初めて、全く積雪のない条件下で行われた。そのため足跡を利用し

での追跡が行えなかった。しかし一方で目撃情報が多く、Z2群が南下して牛滝まで行き、再び北上して福浦まで戻ってくるのが確認された。つまり、ここ数年牛滝集落近辺にサルの群れが出現するようになっていたが、それが下北半島北西部の個体群に由来するのか、それとも南西部の個体群に由来するのかが不明であった。それが今回の調査によって、北西部の群れが南へ行動域を広げたのだということが確認されたわけで、20年前には18kmほど離れていた二つの個体群が、一つの分布域に融合したことになる。

その他にも、下北野生生物研究所の森・和田らが下北半島北部を中心に、松岡らが南西部を中心に継続的な調査を続けており、下北の個体群がその生息域を大きく拡大している様子が、全体として追跡されている。その他に、今年度は北海道大学の中山が南西部の群れを対象にして、採食生態の研究を行った。

なお25年の間、下北に常駐して北限のサルを観察し続けてきた足澤は、今年度限りで犬山に移り、本部業務をこなしながら、逐次犬山から訪れて調査を継続することになった。

3. 上信越研究林

平成10年2月に冬季オリンピックが開催された。当研究林周辺にも数多くの観光客が訪れ、かつ多くのイベントがあった。それを含めて周辺地域ではさまざまな環境変化がおこっており、ニホンザルの生息環境悪化が懸念されている。ただ今年も人手不足から不十分な調査しか行えなかった。周辺に生息する数多くのニホンザル群の中でも、特にこれまで追跡されてきた横湯川流域の群れの動向が気遣われるところである。周辺地域で相次いでいる猿害問題や、地獄谷野猿公園がかかえる個体数増加の問題等、この研究林地域のニホンザルは数多くの問題を抱えており、今後の調査が待たれる。なおオリンピック終了を待つかのように、長年当研究林の維持に尽力された山本教雄氏のご逝去された。ご冥福を祈りたい。

4. 木曾研究林

木曾研究林内のニホンザルの現状については、今年度も人手不足から詳細な調査ができなかった。研究林内の群れはいずれも猿害をおこしてお

り、継続的な捕獲対象となっている。しかし今年度は山の実りがよく、例年に比べて被害が少なかったという。

長野県では全県的なニホンザル分布調査が進められており、中央アルプスをこえた伊那谷側の調査が和田らによって行われた。なお、木曾研究林のプレハブ小屋は老朽化が著しく使用上の問題がでてきたこと、泊まり込みを必要とするような長期調査が少なくなったこと、予算上の制約があって改修も思うに任せないことなどから、今年度いっぱい撤収した。当研究林は犬山から近いこともあり、今後は本部から直接赴いて調査することになる。

5. 屋久島研究林

懸案となっていた県道永田一屋久線（西部林道）の改良工事計画が中止となり、ひとまずは西部林道地域での調査継続が保証された。しかし夏の台風で大きな崖崩れがあり、一時西部林道が通行不可能になるなどの被害があった。今年度も研究活動は活発で、松原幹（霊長研）がメスの交尾期における採食行動を、早川祥子（霊長研）がメスの繁殖戦略について、半谷吾郎（京大人類進化論）が採食生態の年齢差についての調査を長期間行った。その他にも、好広真一（龍谷大）大竹勝（日本モンキーセンター）を中心とする屋久島の高地山岳部での集中調査や、古市（明治学院大）他の調査が続いている他に、J.M.Soltisによる配偶者選択の研究や、D.Hillらによるコウモリ類の調査も断続的に継続されている。

屋久島ステーションの浄化槽工事が行われ、また環境整備が行われた。さらに気象観測装置も据え付けられたが、屋久島研究林には常駐するスタッフがいないため、今後の管理が重要になっている。またステーションの使用、運営について、屋久島長期滞在研究者との話し合いがもたれ、今後協議して決めていくことが了解された。

〈研究概要〉

A) ニホンザルの社会生態学的、とくに自然群の環境利用と個体群の構造

東 滋¹⁾・足澤貞成²⁾

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れが示す生活と社会環境をとらえ、

生存に必要な条件をあきらかにするため、屋久島と下北半島西部の地域個体群について継続的な調査を行っている。

B) 野生ニホンザルの保護および全国のニホンザル個体群に関するデータベースの作成

東 滋¹⁾・渡邊邦夫

「ニホンザルの現況」研究会参加者らと協力して、野生ニホンザル保護のための方策を模索している。その一環として全国の野生ニホンザルに関するデータベースの作成、古分布の復元、ニホンザルに関する文献目録の作成などを行っている。

C) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

渡邊邦夫・山口直嗣³⁾・冠地富士男³⁾

従来からの継続として、ポピュレーション動態に関する資料を収集し、各月毎にほぼ全個体の体重を測定している。また集団内でおこったトピカルな出来事や通年の変化について分析を進めている。

D) 熱帯林における種多様性保存に関する研究

渡邊邦夫

熱帯林の保護と持続的な利用、また未知の有資源を探る目的で、インドネシアでの現地調査を行った。

E) 下北半島に生息するニホンザル群の分裂と生息域の変動に関する研究

足澤貞成²⁾・東 滋¹⁾・渡邊邦夫

現在下北半島に生息するニホンザル群は、次々と分裂し、生息域も拡大し続けている。その経過を追跡すると共に、どのような形で再び安定した状況に落ち着くのかを研究している。

〈研究業績〉

論文

—英文—

- 1) Fujita, K., K. Watanabe, T. H. Widarto, & B. Suryobroto (1997) Discrimination of macaques by macaques; The case of Sulawesi species. *Primates* 38: 233-245.
- 2) Mori, A., N. Yamaguchi, K. Watanabe, & K. Shimizu (1997) Sexual maturation of

female Japanese macaques under poor nutritional conditions and food-enhanced perineal swelling in the Koshima troop. *Intr. J. Primatol.* 18: 553-579.

—和文—

- 1) 毛利俊雄、渡邊邦夫、渡邊毅 (1997) スラウェシマカクの頭蓋サイズの性差. *霊長類研究* 13: 29-39.

報告・その他

—和文—

- 1) 渡邊邦夫 (1997) 幸島を訪れた人とその研究: その1、順位と血縁、「リーダー」あるいは「ボス」. *みやざきの自然* 14: 44-53.
- 2) 大井徹、森治、足澤貞成、松岡史朗、揚妻直樹、中村民彦、遠藤純二、岩月広太郎、大槻晃太、伊沢紘生 (1997) 東北地方の野生ニホンザルの分布と保全の問題点. 「東北地方のニホンザル・ステータスレポート (1996年版)」, 東北ニホンザルの会・ニホンザル保護管理のためのワーキンググループ編. pp. 1-17.
- 3) 大井徹、森治、足澤貞成、松岡史朗、揚妻直樹、中村民彦、遠藤純二、岩月広太郎、大槻晃太、伊沢紘生 (1997) 東北地方の野生ニホンザルの分布と保全の問題点. *Wildlife Forum* 3 (1): 5-22.
- 4) 足澤貞成 (1997) 列島自然史の生き証人—下北のサルの混血問題. 東北ニホンザルの会ニュースレター第2号.

学会発表

—英文—

- 1) Watanabe, K. (1997) Group size variation in some species of *Macaca*: implications of evolutionary processes. Inuyama Symposium "Recent Trends in Primate Socioecology" (Jan.5-8,1998, Inuyama). Abstract, p.2.

—和文—

- 1) 東滋 (1997) ニホンザルの戦後史—拡大造林政策が残したもの. 第3回野生生物保護学会大会シンポジウム (1997年9月、静岡). 講演要

- 1) 平成10年3月31日停年退職
- 2) 教務補佐員 3) 文部技官

旨集 p.4.

- 2) 渡邊邦夫、船越美穂、三戸幸久、和田一雄 (1997) 新聞報道にみるニホンザル。第3回野生生物保護学会大会 (1997年9月、静岡)。講演要旨集 p.47.
- 3) 榎本知郎、中野まゆみ、松林清明、後藤俊二、濱田稔、川本芳、竹中修、渡邊邦夫、B. スリョプロト(1997) トンケアンモンキー・ヘックモンキー種間雑種個体の精巢の組織学的特徴。第13回日本霊長類学会大会 (1997年 7月、札幌)。霊長類研究 13: 280.
- 4) 森明雄、山口直嗣、渡邊邦夫、清水慶子 (1997) ニホンザルメスの性皮の腫脹。第13回日本霊長類学会大会 (1997年 7月、札幌)。霊長類研究 13: 256.
- 5) 渡邊邦夫、三戸幸久 (1997) 新聞報道にみるニホンザル。第13回日本霊長類学会大会 (1997年 7月、札幌)。霊長類研究 13: 262.

サル類保健飼育管理施設

景山 節(施設長・兼)・松林清明・後藤俊二・
鈴木樹理・松林伸子¹⁾・三輪宜勝²⁾・
熊崎清則²⁾・阿部政光²⁾・釜中慶郎²⁾・
前田典彦²⁾・勝田ちひろ²⁾

平成9年度の施設の概要は以下のようであった。

- 1) 新たなBウィルス(-)群の分離と育成を開始した。従来B(-)群であったニホンザル若桜群に加えて、嵐山群、アカゲザルインド群から(-)サルを分離し、新たに2つのB(-)群を構成した。新たな2群は比較的若い年齢層から構成されており、繁殖が軌道に乗るまで数年かかると予想される。なお(+)(-)混在群として高浜群などが残されたが、放飼場の数が限られており今回分離は出来なかった。今後長期的な計画で、(-)サルの分離と育成を順次行っていくことになった。
- 2) 平成9年12月よりサル施設の資料の公開を開始した。サル類基礎データ集として、施設創設以来の全サル個体について、学名、生年月日、性別、体重など10項目に渡るデータを、所内ネットワークを使って電子本として公開した。当面は所員に対する限定公開として、論文などにデータを利用した時はデータ集として引用して

もらうことを要請した。

- 3) 前年度に引き続き施設の改組が概算要求の重点事項として提出された。名称を人類進化モデル研究センターとし、教官増による研究体制の整備を中心とした。施設の発展のため早期の実現を目指している。
- 4) 霊長類研究所サル施設は国立大学動物実験施設協議会の幹事校として活動中である。松林清明助教授は同協議会の「イヌ、ネコ、サル対策小委員会」委員長として第23回総会で経過報告をおこなった。
- 5) 96年度より取り組んでいた、「チンパンジー”アイ”」の人工授精に成功した。平成10年8月に出産の予定である。
- 6) JICAの研修生として、ケニア国立霊長類研究所のSummuel Kago氏が8月に2週間後藤俊二助手の指導により研修を行った。
- 7) 所内にMRIが導入され、サル診療の高度化が推進されることになった。

〈研究概要〉

A) サル類の生殖生物学的研究

松林清明

オス生殖機能の進化を生殖器構造の面から検討するため、マカクから類人猿にわたる各種の精巢微細構造の組織学的検索を進めている。特に精細管と精巢間質との容積比を指標として、霊長類各種を精子量産タイプとテストステロン量産タイプとに類別し、生存戦略との関連を見ている。

B) 実験用サル類の動物福祉の研究

松林清明

飼育下のサル類における動物福祉研究の一環として、環境エンリッチメントの評価を進めている。特に有効な索餌システムや遊具の開発およびサル同士の同居条件について、科学的根拠のある実験的検討を進めている。

C) サル類の寄生虫に関する研究

後藤俊二

マカク類における線虫類の感染動態を明らかにするとともに、ヒト肺犬糸状虫症の実験モデルの

- 1) 教務技官 2) 技官